『徒然草』の構成について

――写本区分からの再考――

長橋祥子

1、『徒然草』構成論のこれまで

『徒然草』の構成論は、橘淳一氏[1]よりその論議がはじまる。作品を、序段から三二段までを一部、二三段から終わりまでを二部の、逐段執筆による二部構成であるとした。このように、作中に登場する人物の任官時期、エピソードなど、時事的話題の年を特定することによって、作品の構成を説明する方法の一方で、作家研究によって解ってきた作者来歴と結びつけて作品の展開の在り方を説明する、松本新八郎氏[2]の四部構成説が出される。一部を序段から三、四〇段、二部を三八段から九一段、三部を上巻後半から一九九段、四部を二〇〇段から終わりまでとする。以後この二つの説明を相補わせ、さらに詳細に掘り下げたのが、続く構成論と言えるだろう[3]。

いずれも、現行章段区分における序段と二四三段の文章が、ここにこのように並んでいるその理由を考えたものである。作中時事の年代考証という方法の背後には、作者が実際にその期間に自分で見聞きしたことを書いたものという作品に対する認識がある。そして、作者来歴から作品内容を説明する方法の背後には、作者自身の人生折々の思考がそのまま書かれたものであるという認識があるのであり、いずれも作品の創作性を追求したものではない。

『徒然草』は創作物として現実から跳躍をはたした作品というよりは、作者が実際に見て聞いて、思って考えたことや過去の回想がそのまま書かれた作品である、もしくは、説話集と同じように、様々な言談の場で語られた逸話を、語り手が配列し、論評した、説話集のようなものとして認識される[4]。作品を語り手が存在する説話集の系譜から考えたとしても、それはもともとバラバラに存在している逸話や談話を、作者がどのように配列したかということの説明であって、一つ一つの文章や話の独立性に対する認識は変わりない。

つまり、これまでの構成論は必ず作品を逸話や談話に、あるいは作者の意見や感想に注目した、現行章段区分という規準を起点にして、この区分によって確立された文章の独立性をあくまで保ちながら、鉄の規則の意味を、その配列のなされ方の意味を考えてきたということが言えるだろう。

しかし、ここで注意したいのは、序段と二四三段という読み方が、江戸期の終わりに定着した、作者以外の人物が読みやす

さを考え、区分し、提示した一つの決まりごとである、ということである。

2、現行章段区分の始まり

『徒然草』の写本は四系統に分類[5]される。本論では、四系統各統の代表的な写本[6]と、江戸期に入って出版された主な注釈書[7]の区分状況を調査した。写本と注釈書の区分では、大きな違いが見られる。

まず、区分数だけを見ても、烏丸本の243区分と、以降のほぼ同数と言える注釈書の区分数に比べて、正徹本、常縁本、東大本の三本は20から30ほど少ない[8]。また、写本には、江戸期註釈書にはみられる章段数の表示も一切存在しない。次の表は各写本区分の実態をできるだけ実物に忠実に再現したものであるが、それぞれ、区分の表示方法がことなる[9]。

烏丸本は改行のみで区分を示す。また、改行ではない文章の終わりが文末にこない。来たとしても「○」をつけて文章がまだ続いていることを明示しているため、校注者側が区分するつもりのないところで切って読まれることがない[10]。

しかし、他の三本の写本は事情が異なる。正徹本と東大本は、区分が改行と次の文章行頭につけられる朱墨の「|」や「●」の印で示される。しかし、これはどの区分においても徹底されているのではなく、文章の終わりが文末までつまり、次の文章の冒頭が次行の行頭にくるという改行意思があいまいな箇所にも、朱墨の「|」や「●」印が多くつけられている[11]。

また、正徹本では、改行されているのに朱点がつかない箇所

正徹本

●つれ〳〵なる…
心にうつり…
かきつくれ…
いてやこの…
ことこそお…
かしこし竹…
たねならぬ…
ありさまさ…
はるきは、…
はふれにた…
かたはほと…
みつからは…
法師ばか…①
木のはしの…
けるさるこ…
つけていみ…
やうに名聞…
らむとそお…
あら…なむ(改)
●人はかた…②
あらまほし…
からすあひ…
あか…けれ(改)
●めてたし…③
えむこそく…
むまれつき…
こき…らむ(改)
●かたち心さ…④
しなくたり…
りてかけす…
ありたきこ…
和哥管弦の…
鏡ならむこ…
からすはし…
ましうする…
れ(改)

常縁本

つれくなるま…
にうつりゆく…
きつくれはあ…
やや此世にむま…
こそ多かめれ…
竹のそのふの…
らぬこそやむ…
さらも也たゝ人…
みゆ其子むま…
まめかしそれ…
にあひしたり…
もふ：法師…①
からぬものは…
るゝよと清少…
いきほひのま…
しとはみえす…
名聞くるしく…
ほゆるひたふ…
きかこなむ(改)
人はかたら…②
ほしかるへけ…
やう有て詞お…
めてたしと…③
むこそくらお…
きたらめ心は…
つさ…らむ(改)
かたら心さ…④
たりかほにく…
かけすけをさ…
の道又有職に…
いみしかるへ…
聲たかくて拍…
けこ…けれ(改)

東大本

つれくなるま…
うつり行よし…
はあやしうこ…
れてはねかは…
御位はいとも…
の種ならぬそ…
さら也たゝ人…
みゆそのこむ…
まめかしそれ…
ひした…口おし
法師ばか…①
はしのやうに…
にさる事そか…
つけていみし…
んやうに名聞…
らんとそ覓ゆ…
らま…なむ(改)
人はかた…②
へけれ物うち…
詞お…けれ(改)
めてたし…③
こそくらおし…
きたらめ心は…
うつ…らむ(改)
かたら心…④
たりかほにく…
おさるゝこそ…
文の道作文和…
方人のかみな…
らすはしかり…
うす…けれ(改)

烏丸本

つれ〳〵なるま…
すゞりにむか…
よしなし事を…
つくれま○あ…
しけれ○いで…
はしかるべき…
門の御位はい…
赤葉まで人間…
なき○一の人…
人など給はる…
むまごまでは…
かし○それよ…
つゝ時にあひ…
からはいみじ…
おし
法師ばかり…①
あらじ○人に…
思はるゝよと…
さることぞか…
しりたるにつ…
増賀ひじりの…
ぐるしく仏の…
とぞおぼゆる…
くあ：なん
人はかたら…②
そあらまほし…
たるきゝにく…
葉おほからぬ…
しけれ○め…③
ろをとりせら…
口おしかるべ…
れつきたらめ…
うつ：かた…④
き人も○ざえ…
頼にくさげな…
かけずけをさ…
ありたき事は…
文和歌管弦の…
人の鏡ならん…
手などつたな…
かしくて花子…

がある[12]。東大本では、一つの文章の終わりが行の半ばにあって、次の文章がすぐにつづいている場合でも、「/」印でそこに区分が示される箇所がある[13]。つまり、改行で示した区分と印による区分には、明らかな見解の相違があるのである。改行区分を設けて本文を書写した人物と、朱墨で記しを付けた人物がこの二つの写本では異なる可能性が大きい。

常縁本は、大きな章段の移動があり、その点で既に現行章段区分とは異なるが、それはひとまず置いて区分の表示を見てみると、基本的には改行区分のみで本文区分を示す。しかし、烏丸本のように改行か非改行かを明示する処理はなされておらず、正徹本や東大本と同じで、一つの文章の終わりが行末までがつまり、次の文章の冒頭が次行の行頭から始まる箇所が多くある。常縁本における「/」印箇所[14]は、このような改行の意思があいまいな三十五箇所と、文頭が前の文章と改行で区分されておらず行の半ばにある箇所に二箇所、改行されている箇所に二箇所、現行九八段の一言法談から抜き出した五項目の文頭に五箇所、計四四箇所だ。常縁本においても、「/」点区分をほどこした人物の目の前には、改行区分のみの本文がまず存在し、所々に改行区分とは別の規準や観点にもとづいて、印が付けられたということが考えられる。

3、印区分の検討

正徹本と常縁本と東大本、この三写本には、烏丸本のように、前の文章が行末までしっかりつまって終り、新たな文章が次行の行頭から始まる、改行ととろうとすれば改行ととれ、つながっていると読めばつながっていると読むことの出来る箇所がたくさんある。では、この三本では、そういった部分に必ず、朱墨点がつけられているのかというとそうではない。あくまで、現行章段区分で区分されていて、なおかつ改行意思が曖昧な箇所にだけ、「/」や「●」の印が付けられているのである。これらの写本には、現行章段区分では区分されていない、しかし、一応まとまりのある文章として区分することができて行末いっぱいでおわり、次の文章が次行の行頭からはじまる部分には、朱墨による印がつけられていないのである。

左は東大本の本文である。一行の字数はまちまちであるが、実際の写本では、文末はそろっている。

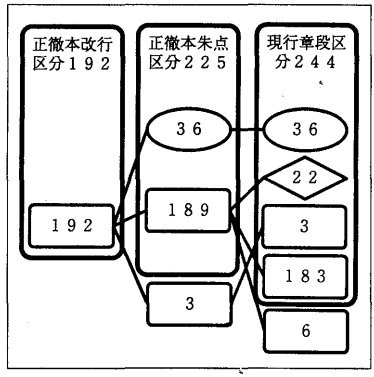
＼いやしけなる物ゐたるあたりにてうとのおほきすゝ
りに筆のおほき持仏堂に仏のおほきせんさい
にいし草木のおほきい色のうちに子孫のおほき
人にあひてことはのおほき願文に作善おほく
かきのせたるおほくてみくるしからぬ文車のふみ
塵塚のちり（改行）
1 ＼世にかたりつたふる事はまことはあひなきをやおほくは
2 みなそらごと也あるにも過て人は物をいひなすに
3 ましてとし月すきさかひもへたゝりぬれはいひた
4 きまゝにかたりなして筆にもかきとゝめぬれはやかて
5 さたまりぬみち〳〵の物の上手のいみしき事なと
6 かたくなゝる人のその道しらぬはそゝろに神の
7 ことくにいへとも道しれる人はさらに信をおこさす ↑
8 をとにきくとみる時とは何事もかはる物也かつあらは
9 るゝをもかへりみすくちにまかせていひらすは
10 やかてうきたる事ときこゆ又我まことしからすは
11 思ひなから人のいひしまゝにはなのほとをこめきていふ

１２　はその人のそらことにはあらすけに〳〵しく所々う
１３　ちおほめきしらぬよしゝてさりなからつま〳〵あ
１４　はせてかたるそらことはおそろしき事也わかため面目
１５　あるやうにいはれぬるそらことは人いたくあらかはすみな
１６　人の興するそらことはひとりさもなかりし物をといはん
１７　もせんなくてきゝゐたる程に證人にさへなされて
１８　いとゝさたまりぬへしとにもかくにもそらことおほき世
１９　也たゝつねにあるめつらしからぬ事のまゝに心えたら
２０　んよろつたかふへからすしもさまの人の物かたりは
２１　みゝおとろく事のみありよき人はあやしき事を
２２　かたらすかくはいへと仏神の奇特權者の傳記さのみ
２３　信せさるへきにはあらすこれは世俗のそらことをねん
２４　ころに信したるもをこかましくよもあらしなといふ
２５　も詮なけれは大かたはまことしくあひしらひてひとへ
２６　に信せす又うたがひあさけるへからす（改行）

また説明の便宜のため、「**世にかたりつたふる事**」以降、現行七四段には行番号をふった。「↑」の付いている七行目は、文章の文末が行の終わりまでつまっており、そこで一応文章がきれている。この七行目の文末「**人はさらに信をおこさす**」は、他の三つの写本ではいずれも行の半ばにあるが、行末で文章が切れていることが写本校注者の区分意識の表れであるとすれば、少なくとも東大本では、１から７を、物の上手のすばらしい業をかたくなでその道をしらない人は神のように云うという主旨の文章、８から２６までを聞くと見るとでは大違い、空言が本当のことのように語られるメカニズムが検証された文章として、朱墨印をつけることもできるはずだ。しかし、印はこの箇所にはつけられていない。

次の図一「現行章段区分の区分採用状況（正徹本）」は、正徹本の改行区分１９２区分が朱墨点区分で２２５区分に細分化され、更に現行章段区分で２４４段に細分化される、その細分化の過程を図にしたものである。一番左が正徹本改行区分の区分状況、真ん中が正徹本朱墨点区分の区分採用状況、右が現行章段区分の区分採用状況である。

図一　現行章段区分の区分採用状況（正徹本）



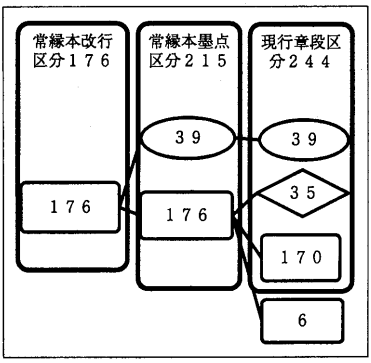
本文が書写される時点であった改行区分数を□で、改行区分にはない、朱墨点区分独自の区分数を○で、改行区分にも朱墨点区分にもない、現行章段区分独自の区分数を◇で囲って現してある。正徹本の改行区分１９２は、朱墨点区分では１８９区分を採用され、３区分は不採用。そこに、行末でひとつの文章が終わり次行の行頭から新しい文章がはじまる改行意思のあいまいな箇所に、朱墨点によってつけられた３６区分が加わり、

正徹本は朱墨点区分の時点で225区分になった。

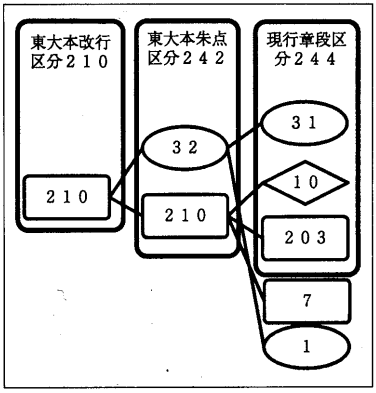
現行章段区分では、改行区分でも朱墨点区分でも採用された189区分のうち6区分を不採用とし、朱墨点区分が不採用とした改行区分3区分を採用。さらに朱墨点区分の際に新たにつけられた36区分をそのまま採用。改行区分にも朱墨点区分にもなかった現行区分の際につけられた区分22が加わり、合計244区分となっている。

正徹本の朱墨点区分は、225段中219段を現行章段区分と同じくする。改行区分と同じくするのは189区分で、より現行章段区分に近い規準で区分されたということができるだろう。各写本における区分採用状況の実態は図二、図三の通りである。[15]

図二　現行章段区分の区分採用状況（常縁本）



図三　現行章段区分の区分採用状況（東大本）



以上のことから考えられるのは、写本における朱墨印は、一つの文章の終わりが行末までつまり、次の文章の始まりが次行の行頭に来ている箇所が書写校注者の改行の意の表れであると判断されて、つけられたというわけではなく、もともと書写校注者に改行の意がない箇所に、江戸期注釈書や烏丸本などの現行章段区分に近い写本及び注釈書の規準にもとづいてつけられたのだろうということである。

4、写本改行区分と現行章段区分

次に示すのは、岩波文庫新訂『徒然草』[16]の本文を立て続けに並べたもので、現行章段区分、第七十六から七八段である[17]。

七十五段
つれ〴〵わぶる人は、いかなる心ならん。まぎる〻方なく、たゞひとりあるのみこそよけれ。世に従へば、心、外の塵に奪はれて惑ひ易く、人に交れば、言葉、よその聞きに随ひて、さながら、心にあらず。人に戯れ、物に争ひ、一度は恨み、一度は喜ぶ。その事、定まれる事なし。分別みだりに起こりて、得失止む時なし。惑ひの上に酔へり。酔の中に夢をなす。走りて急がはしく、ほれて忘れたる事、人皆かくの如し。
未だ、まことの道を知らずとも、縁を離れて身を閑かにし、事にあづからずして心を安くせんこそ、しばらく楽しぶとも言ひつべけれ。「生活・人事・伎能・学問等の諸縁を止めよ」とこそ、摩訶止観にも侍れ。

第七十六段
世の覚え花やかなるあたりに、嘆きも喜びもありて、人多く行きとぶらふ中に、聖法師の交りて、言ひ入れ、たゝずみたるこそ、さらずとも見ゆれ。
さるべき故ありとも、法師は人にうとくてありなん。

第七十七段
世中に、その比、人のもてあつかひぐさに言ひ合へる事、いろふべきにはあらぬ人の、よく案内知りて、人にも語り聞かせ、問ひ聞きたるこそ、うけられね。ことに、片ほとりなる聖法師などぞ、世の人の上は、我が如く尋ね聞き、いかでかばかりは知りけんと覚ゆるまで、言ひ散らすめる。

第七十八段
今様の事どもの珍しきを、言ひ広め、もてなすこそ、またうけられね。世にこと古りたるまで知らぬ人は、心にくし。
いまさらの人などのある時、こゝもとに言ひつけたることぐさ、物の名など、心得たるどち、片端言ひ交し、目見合はせ、笑ひなどして、心知らぬ人に心得ず思はする事、世慣れず、よからぬ人の必ずある事なり。

第七十六段から七八段は、現行章段区分が、七六段を法師が人にまじわっているのはみぐるしいという主旨の文章、七七段を巷に広がるうわさ話には疎い方がいいという主旨の文章、七八段を今世間で話題の的になっている話をもてはやすのは見苦しいことだという主旨の文章と受け取っている。この三段にあたる文章を続けて読むと、人間に交わり、うわさ話に花を咲かせ、またそのうわさ話を広げる中心人物ともなっている、法師の否定ということで読めるのに対し、現行章段区分では、単なる社交上の注意事項、処世術を述べた文章が四つ並んでいると読めてしまうのである。

しかし、東大本では、七十六段の末尾「人にうとくてありなん」がその行の行末までつまり、七七段の冒頭が次の行の行頭からはじまっていて、現行七十六段と七十七段の間に改行区分を設けていない。また、常縁本では、現行七十五段の文末が行末までつまり、七六段の初めが次の行の行頭にきており、「/」の印がつけられてはいるが、改行区分を設けた常縁本の書写校

注者はおそらくひとまとまりと考えて、七十五段「つれ〴〵わぶる人は、」以下の縁を離れて身を閑かにすることをすすめた文章と七六段を読んでいただろう。

東大本の書写校注者は、人に交わる法師の様子を述べた文章として現行七六、七七段をひとまとまりと考え、常縁本は、現行七五、七六段を、身を閑かに、所縁を離れることを勧める文章としてひとまとまりと考えた。現行七六段は、改行区分を設けた二本の書写校注者それぞれの興味・解釈によって、人に交わる法師の様子を描写したものととられるのか、所縁放下を勧めるものととられるのかが決められていることになる。

つまり、もともと現行七六段の本文は、先の七五段部分ともつながっており、後の七七段部分ともつながっている。それを各書写校注者が自分の読書の目的や興味に併せて、よりまとまりが感じられる方につなげて改行したということが言えないだろうか。

改行区分時点では、書写校注者によって区分の違いがでていて、そこから読み取られる意味に力点のかたよりが見られるものの、この部分、七五段から七八段までをつなげて読んだときに了解される、世に広まる噂話や諸々の話題への懐疑と、その話題にまどわされることのない、ましてや、それを率先して広めることがないからこその閑居の推奨という、意味がばらばらにされていない。しかし、現行章段区分においては、所縁放下のすすめと、人に交わることを批難した文章、人のうわさ話に耳ざといことの見苦しさを述べた文章は、すべてそれぞれ処世訓や、マナーを述べたものとして独立しており、つながってゆくことで意味が深まってゆくということがない。

5、改行区分からの本文理解

このように各写本と現行章段区分の見解が分れる箇所をもう一つあげてみよう。次にあげるのは岩波文庫新訂『徒然草』第七九段から八一段の本文を並べたものである。説明の便宜のために①～⑤の番号をふった。

正徹本は①と②の間で改行、③と④の間で改行をした。これをわかりやすく記号で示すと「①／②③／④⑤」である。②③をひとまとまり、④⑤をひとまとまりと考えたのである。そして常縁本と東大本は「①②③／④／⑤」、烏丸本は「①／②／③／④／⑤」、現行章段区分では「①／②／③④／⑤」と区分した。

第七十八段

① 今様の事どもの珍しきを、言ひ広め、もてなすこそ、またうけられね。世にこと古りたるまで知らぬ人は、心にくし。いまさらの人などのある時、こゝもとに言ひつけたることぐさ、物の名など、心得たるどち、片端言ひ交し、目見合はせ、笑ひなどして、心知らぬ人に心得ず思はする事、世慣れず、よからぬ人の必ずある事なり。

第七十九段

② 何事も入りたゝぬさましたるぞよき。よき人は、知りたる事とて、さのみ知り顔にやは言ふ。片田舎よりさし出でたる人こそ、万の道に心得たるよしのさいらへはすれ。されば、世に恥づかしきかたもあれど、自らもいみじと思へる気色、かたくなり。

よくわきまへたる道には、必ず口重く、問はぬ限りは言は

ぬこそ、いみじけれ。

第八十段

③ 人ごとに、我が身にうとき事をのみぞ好める。法師は、兵の道を立て、夷は、弓ひく術知らず、仏法知りたる気色し、連歌し、管弦を嗜み合へり。されど、おろかなる己れが道よりは、なほ、人に思ひ侮られぬべし。

④ 法師のみにもあらず、上達部・殿上人・上ざままで、おしなべて、武を好む人多かり。百度戦ひて百度勝つとも、未だ、武勇の名を定め難し。その故は、運に乗じて敵を砕く時、勇者にあらずといふ人なし。兵尽き、矢窮りて、つひに敵に降らず、死をやすくして後、始めて名を顕はすべき道なり。生けらんほどは、武に誇るべからす。人倫に遠く、禽獣に近き振舞、その家にあらずは、好みて益なきことなり。

第八十一段

⑤ 屏風・障子などの、絵も文字もかたくなる筆様して書きたるが、見にくきよりも、宿の主のつたなく覚ゆるなり。

大方、持てる調度にても、心劣りせらるゝ事はありぬべし。さのみよき物を持つべしとにもあらず。損ぜざらんためとて、品なく、見にくきさまにしなし、珍しからんとて、用なきことどもし添へ、わづらはしく好みなせるをいふなり。古めかしきやうにて、いたくこと〳〵しからず、つひえもなくて、物がらのよきがよきなり。

東大本、常縁本は、①②③を、知ったかぶりの醜さを述べた文章、④を武を好むことの否定⑤を屏風障子など調度にいろいろ手をくわえることの愚かさを述べた文章ととる。

正徹本は、東大本や常縁本のように①②③をひとまとまりとは捉えないが、②③をひとまとまりと捉える。①②③とまとめて読む読み方に比べて、知ったかぶり全般というよりは、道における知ったかぶりに的が縛られている。そして④⑤を続けて読むことが非常に特徴的である。

烏丸本は、①から⑤をすべて切っており、①をはやりの噂に対する好ましい身の処し方を述べたもの、②をよくわきまえた道であればこそ口は重く有るべきだというやはり身の処し方を述べたもの、③を自分の道でないところでの物知り顔の愚を述べたもの、④を武を好むことの愚、⑤を持てる調度をごてごて飾る愚というように、一つ一つが淡い関連性を持ちながらも、独立した処世訓として受け取れる。

そして現行章段区分では、③④をひとまとまりと考え、二つのことを言っていると理解されていたものが、③を④という本題にはいる前置きとして位置づけるようになっている。

③の「人ごとに、我が身にうとき事をのみぞ好める」以下の文章は、①から続けて読むのならば、はやりの世間話に通じて、それを人々がもてはやすありさまが、自分の道ではないのに万の道を知れるような物知り顔の態度にそのまま通じる、という話題の深まりを決定づける部分である。それが現在すべての身分の人が武を好むという風潮を歎く④の文章につながってゆく、しかし、②の文末「よくわきまへたる道には、必ず口重く、問はぬ限りは言はぬこそ、いみじけれ。」をこの部分で作者が言いたいことの結論とし、③を④の前置きとしてひとまとまりとした切り方は、よくわきまえたる道には口が重くあるべきという文章と、武道を否定する文章として、両者をはっきり区分してしまう。現行章段区分では、②から③へ話題が深まるということがない。

正徹本以下三写本における区分では、③の後で一度切れる。しかし、③と④の話題にはほぼ類似の話題をあつかった連続性が感じられるため、決定的に切れているという感じをうけない。一方、現行章段区分は、①②と③④の間に決定的な断絶をつくってしまっているのである。各区分に完結性をもとめ、その文章における作者の意図をその区分を読んだだけではっきりと読み取ろうというのが現行章段区分の在り方であるといえるだろう。それにくらべて、正徹本をはじめ、東大本、常縁本の改行区分は、各区分の完結性が低い、その区分で完結せず次の区分に続いている可能性を読みとることができる。

現行七八段から八一段を通して読むと、そのときにたまたま流行している他者の道の、上面だけを摂取し、あたかも「万の道に心得たる」ように振る舞うことへの批判を読み取ることができる。「武」とはまさに見た目や格好だけを調えて、その人を強く力あるものとみせることができる最たる好例である。しかし、鍛錬や特別な目的もなく、気軽に首をつっこめば、みだりに立ち入らなければ味わうことのなかっただろう、この世の地獄をみることになる道なのである。

本文は続けて読んでゆくことで、①の内容が深まってゆく、①②③④がすべて有機的につながって、より深い意味を生みだす仕組みになっているのである。とくに正徹本の区分は、題材という点からは一見つながりの見えない④と⑤をつなげて読んでいる。持っている屏風・障子に専門家でもないのにむだな飾りをすることと、武への批判がひとまとまりと読め、単なる「武」の批判にとどまらず、お手軽な底上げの批判という意味を産み出している。この部分の書かれた意図をより的確につかんだ区分を展開していると言えるだろう。

以上、現行七五段から八一段を写本の改行区分に注目して読んでみると、文が続いてゆくことで深まり少しずつあきらかに成ってくるような、作品全体を貫く作者の意図というものの存在を感じることができる。巷に交わり、本来知るはずのないうわさ話に詳しく、ましてそれを言い広めるような、また、全くその道の本来の深さをしらないのに、いやそれだからこそ安易にそれで自分をごてごてかざるような、いわば自分を見失った、お手軽な万能主義への批判がこの部分を通して繰り広げられていることが読み取れるのである。

朱墨点区分がなされる以前の、写本の改行区分によって区分された本文に注目してわかるのは、本来作品はもっとつながっているものとして読まれていたということである。改行区分によって区分される本文というのは、各写本とも、現行章段区分のように、区分毎に独立、完結したものでなく、前の文章とも後に続く文章とも、つながりが感じられるような区分のされ方であったということが言えるだろう。正徹本以下、四本の写本と江戸期註釈書の最大の相違は、まさに、作品をもっとつながったものと捉えるか、一区分一区分が独立したものを考えるかという点である。

それは、四本の写本においては必ず採用されているが、徒然草注釈書の先駆け『徒然草寿命院抄』以降の注釈書区分には、まったく採用されることのなかった、現行章段区分における序文と第一段をわける区分、現行第一段の内部を三つないし四つ

にわける区分、先にもふれた、現行八十段の内部に設けられた「法師のみにあらず」以下の文章とそれ以前の文章をわける区分、酒の害と効用を述べる現行一七五段の内部に設けられた区分を見ても言えることだ。

第一段は此の世に生まれでて望むものについて、列挙している部分であるが、写本においては、身分だったらこういった身分がよい、見た目についてはこういう見た目が良い、心ざまであったらこういった心ざまが良い、才芸だったらこういった才芸に優れているのが良いという望の単なる列挙であり、それは身分高い人の身の処し方はこういったのが良いという、現行第二段の文章に、スムーズに続いているという印象をうける。写本においては、この部分に何らかの結論や、世渡りのための教訓を得ようという意図がないことがわかる。

しかし現行区分に至る過程で、写本にはあった改行区分は削除されてまった。それは、この世に生まれて一番願わしいものは何か、その結論をこの短い現行第一段部分の中に求めたからである。だからこそ、この部分を適切に読んだために設けられてあった2つないし3つの改行区分を無くし、本来の本文の展開を無視して、才能ならこんな才能があるのが望ましいという一部分を、此の世に生まれて一番願はしいことの結論と定めて、後に続いてゆく文章とのつながりを断ち切ってしまったのである。

また酒の害と効用をのべる現行一七五段にあたる部分でも事情を同じくする。写本では前の文章からのつながりと、後の文章へのつながりを視野にいれて、前半の酒の害をのべる文章と後半の酒の害をのべる文章の間に改行区分を入れている。もともと作者はここで酒の良し悪しを論じたのでない。酒を人に強いること、すなわち理不尽な、根拠のない決まりを強いることに対する批判が酒の害の部分では述べられ、酒の効用を説く部分では、強いられない配慮の酒、皆が自然に寄り集まって酌み交わされる酒について、すなわち、人の自然な和のありかたについての洞察がつづいているということがいえるだろう、そしてそれは、次の現行一七六段の帝となっても、ただ人であったときの習慣をつづけた光孝天皇の逸話にスムーズにつながってゆくのである。

しかし江戸期の註釈書では、写本には存在した酒の害を述べる部分と酒の効用を述べる区分を統合してしまって、まず酒の害を解き、後に効用を進め、酒はほどほどにするべきだというような酒の飲み方に対する教訓や処世術を見出す読み方をしているのである、この酒について述べられる部分を前後のつながりから断ち切って、切り出し、完結させ、そこに強引に酒の飲み方を戒めるという教訓を抽出しているのである。

6、正徹本改行区分の分析

先に挙げたような、現行八十段の後半にあたる文章を、一見話題ということからは近似がみられない八一段とつなげているこのようなケースは正徹本の改行区分にはよく見られる。

> 38　かねにをらされはなり迷の心をもちて名利の
> 　　要をもとむるにかくのごとし万事みな非也
> 　　いふにたらすねかふにたらす（改行）

39 ●ある人法然上人に念佛の時眠におかされ〇行を
おこたり侍こといかゝして此さはりをのそき侍らんと
申ければ目のさめたらむほと念仏したまへとこたへ
られけるいとたうとかりけり又往生は一定と
おもへは一定不定なりヒとおもへは不定なりといはれ
けりこれもたうとし又うたがひなからも念仏すれは
すれは往生すといはれけりこれも又たうとし

40 ●いなはの国になにの入道とかやいふもの、むすめかた
ちよしとき、えて人あまたいひわたりけれとこの
むすめた、くりをのみくひてさらによねのたくひ
をくわさりけれはか、ることやうの物人にみゆへき
にあらすとておやゆるさざりけり（改行）

41 ●五月五日賀茂のくらへ馬を見侍しか車の
まへにさう人たちへたて、みえさりしかはをの〳〵
おりてらちのきはによりたれとことに人おほく
たちこみてわけ入へきやうもなしかゝるおりに
むかひなるあふちの木に法師の、ほりて木の
またにつね、て物みるありとりつきなからいたうね
ふりておちぬへき時にめをさますことたひ〳〵なり
是をみる人あさけりあさみてよのしれ物かなかく
あやうき枝のうへにてやすき心ありてねふ〇る
らんよといふに我か心にふとおもひしまゝに我等
か生死の到来た、いま〇もやあらんそれを忘て物
見て日をくらすおろかなることは猶まさりたる
物をといひたれはまことにさにこそ候けれもとも
おろかに候といひてみなうしろをかへりみてこゝへ
いらせ給へとて所をさりてよひいれ侍にきかほとの

右は現行三八段から四一段の正徹本本文である。正徹本では現行三九段と四〇段をひとまとまりとする。この部分をどのように正徹は読んだのだろうか、検討してみたい。まず現行三九段にあたる部分は、法念上人が念仏の功徳をのべた話で、四〇段は因幡の国の栗ばかり食うむすめの話である。一見この二つの文章にひとまとまりとみることのできる要素はない。この二つの文章だけをみていたのでは説明がつかない、てんでばらばらの話のように思える。

しかし、前後現行三八段と四一段の内容を考慮に入れて考えてみたい。三八段は名利に突き動かされることの愚を述べる内容である。そして四一段が、生死の到来を忘れて物をみることは、落ちそうな木の上で居眠りをし、落ちそうになってあわてて起きるのとおなじことであるという内容である。名利はむなしく、何が可で何が不可かそれは紙一重であるということから、四一段の死が今にもせまるのに物をみて日を暮らしている場合ではないという内容につなげているのが、現行三九段、四〇段の文章だとすると、ひたすら念仏をして成果をだすということよりも、眠りからさめている間だけでも、疑いながらでも念仏すれば往生するというその法念上人の教えは、三八段の可も不可も一定、人の聞きを喜ぶなかれということの延長線上にあることになる。

そして、続く因幡の国の栗ばかり食べる娘の話では、美しいという評判がたっても、この娘は栗ばかり食べる故に、人にみられることもなく、籠もって暮らすのである。評判は栗を食べる娘には何の意味もなさない。評判のむなしさ、何が好くて何が悪いのか、これも可も不可も一条という例であると考えることができる。また、「人にみゆ」ことがない隠棲の暮らしとい

う点で、次の四一段の祭りをみて生死の到来を忘れているという閑居への推奨を視野に入れた一言に内容が通じるのだ。

三九段も四十段も現世の華やかな評判や猛烈な念仏信仰といった、極端な思想への傾倒に疑問をなげかける文章であるということができる。もしくは、往生に意外にも自分をいためつけるような修行の必要がないこと、美しいと評判の娘が実は栗ばかり食べる変わった嗜好の持ち主であることに、評判を裏切るような現実のギャップを表現した部分ともとることができる。そしていずれにしても、正徹本の改行区分は、現行三九段と四〇段をひとまとまりとして区分することで、前後の現行三八段と四一段をスムーズにつないでいるということがいえるだろう。

ことはり誰かは思よらさらむなれとおりからの思ひ
かけぬ心ちしてむねにあたりけるにや人木石にあらねは
時にとりて物を感することなきにあらす（改行）

42
●唐橋中将といふ人の子に行雅僧都とて
教相の人の師する僧ありけり気のあかる病
ありてとしやう〜たくるほとに鼻の中ふさ
かりていきもいてかたかりけれはさま〜につくろい
けれとわつらはしくなりてめまゆひたひなともはれま
とひてうちおほひけれはものもみえすにのまひの
おもてのやうにみえけるかたゝおそろしにおそろしく
鬼のかほになりて目はいたゝきのかたにつきひたい
のほとはなになりなとして後はうの中の人にも
みえすこもりねてとし久くありて猶わつらはしく
成て死にけりかゝる病もあることにこそありけれ

43
●春のくれつかたのとかにえむなる堂にいやしからぬ家の
おくふかく木たちふりて庭に散しほれたる花見
すくしかたきを入てみれは南おもてのかうしみな
おろしてさひしけなるに東にむきてつまとのよき
ほとにあきたるかみすのやれよりみれはかたら
よけなるおとこのとし廿はかりにてうちとけた
れと心にくゝのとやかなるさましてつくゑに文を
くりひろけて見ゐたりいかなる人なりけんたつ
ねきかまほし（改行）

44
●あやしの竹のあみとのうちよりいとわかき男の
月のかけに色あひさたかならねとつやゝかなるかり
きぬにこきさしぬっきいとゆへつきたるさまにて
さゝやかなるわらはひとりをくしてはるかなる田の

四一段につづく四二、四三段の文章も正徹本は改行区分を設けず、ひとまとまりと考えている。右は現行四二段から四四段にあたる正徹本本文である。

行雅僧都が気のあがる病で鬼のような顔になり、ずっと籠もっていたというエピソードと、春の夕暮れにいやしからぬ家のなかに発見した、かたちよげで年二十ばかりなる男の心にくい様子の描写、おなじく籠もっているということでは話題が共通すると言えるが、余りにも籠もっている状況や理由が異なる。行雅僧都は病気でどうしても籠もらざるをえなくなった。しかし、二十ばかりなる男はみずから籠もり、机に文を広げるのである。もともと籠もる気がなかった者と、自ら籠もる者、この二つのエピソードをひとまとまりとし、何か一つのことをいっているとすれば、それは、自ら籠もっている者への賞賛と、もともと籠もる気がなかったものへ罰を表現しているか、もしくは、二十ばかりのかたちよげなる男が閑居に籠もることも、行

雅僧都が病気で籠もらざるをえなくなったのも、実は同じこと、優雅に机に文をひろげるのも、顔が腫れみちる病にかかってどうしても外に出られないような、切実さが背後には隠されている、若くかたちよげな男にも同じく死が迫っているというその差し迫った状況を浮き彫りにした文章と考えることができる。そして四一段の生死の到来がすぐそこに迫っているという文章と、四四段の月影に笛の音を立てる宮の仏事の描写は、正徹本の改行区分においては、四二、四三段をひとまとまりとすることで、スムーズに結びつけられているのである。

また次のような箇所も前後の文章とのつながりを考えると納得が出来る。

124 ●是法は浄土宗にはらすといへとも学匠を
たてす只明暮念佛してやすらかに世を
125 すくすありさまいとあらまほし人におくれて
四十九日の仏事に戒聖を請し侍しに説法
いみしくして皆人涙をなかしけり導師かへ
りて後ちやうもんの人ともいつよりも殊今日は
たうとく覚侍つと感しあへりかへりことに
なにとも候へあれほと唐の狗に似候なんうへはと
いひたりしにあはれもさめておかしかりき
さる導師のほめやうやはあるへき又人にさけ
すゝむるとてをのれまつたへて人にしゐたて
まつらんとするはけんにて人きらむとするに
にたることなり二かたにはのつきたれはも
たくる時まつわか頭のきるゝゆへに人をは
えきらぬ也をのれまつ也いてふしなは
よもめさしと申きけんにてきり
心みたりけるにやいとおかし(改行)

126 ●はくちのまけきはまりてのこりなく
うち入せむにあひてはうつへからすたちかへり
つゝけてかつへき時のいたれるとしるへし其の
時をしるをよき博打といふ也とある物申き
127 ●改て益なきことは改ぬを力とするなり(改行)
128 ●まさふさの大納言はさえかしこくよき人
にて大将にもなさはやとおほしめしけるころ

正徹本改行区分は、現行区分における一二四段と一二五段を、また、一二六段と一二七段をひとまとまりと考えた。一二四段と一二五段も、一見ひとまとまりと考えられない内容である。一二四段は是法法師が学匠をたてないでただ明け暮れ念仏をして過ごしたという内容である。そして一二五段は四十九日の法要で聖の説法に皆が涙を流すなか、或る男が、あれほど唐の狗に似ていれば、それは有りがたく思えるだろうといった、同じ男が、酒を人に勧めるために自分がまず酒を飲むのは、二方に刃のついた剣で人を切ろうとして先に自分の頭が切れるのと同じだということもいっていて非常に興味深かったという内容である。

この二つないし三つのエピソードがひとまとまりとして読まれ、何か一つの表現効果をあげているとすると、考えられるのは学匠をたてることへの否定である。説教を、或る男は唐渡りの珍しいものに喩えた、つまり物珍しさ、唐渡りということだけで人が感動しているのだという、感動の正体の指摘がこの男によってなされていることになる。そして、その延長線上に、酒を人に飲ませるためにまず自分が飲むことは、二刃の剣で人

を切ろうとして、まず自分の頭が切れるのと同じだという話を考えるなら、酒のように人を酔わせるような大がかりな物言に対して、まず自分が酔ってしまうので、結局それを人に飲ませることができない、大言に対するいましめととることができるのである。

さらに、続く現行一二六段と一二七段をひとまとめと読む読みがどのようなものかをこの流れから検討すると、一二六段は博打ちが負けすぎて残りなくすべて打ってしまおうとするのに出会っては、こちらはそれ以上打ってはいけない、必ずつづけて勝つときがくるからだという内容、一二七段は改めて特に益のないときは、改めないほうがいいというに内容である。この二つの文章がひとまとまりで何か一つの表現をしているとすれば、博打で負け続けても、そのまま打ちつづければ、いつか勝ちつづける時がやってくる、負け続けているからと言って、それを辞めてしまわなければ必ず勝ち続ける時が来るということである。それは、改めて特に益がないときは改めないことが力となるという一文で方向づけられる。そして一二八段の弱者をいじめてはならないという話題につづくのである。正徹本の改行区分から本文を読むならば、この現行一二四段から一二八段は、虎の威を借る狐として人を感動させ、人を改めさせることへの批判、時流にのっているというだけでむやみに評判が高く、力があるものに対する批判を展開している部分であるということができるだろう。そしてそれは、ほんとうに道を知るなら決して人と争わず、善にほこらず、ともがらと争わず、己を知るを本当の智とするという先々の展開につながってゆくのである。

7、まとめ

『徒然草』は、各写本の改行区分をもとに読み解いてみるならば、①の文章が②の文章に、②の文章が③の文章に③の文章が④の文章にというようどんどんとつながっており、それによって文章が展開してゆく、意味が深まってゆくような作品と読むことが出来る。作者の執筆時の意識を想像すれば、①の文章から②の文章②の文章から③の文章という読みは、まだ、題材や話題による区分に気を取られた読み手側本位のとらえ方であるのかもしれない。写本は後の時代のものになるほど素材に注目して、改行区分を細分化させてゆく傾向が目立ってくるが、それでも写本の改行区分で本文を読む限り、そこには、現行章段区分ほどに、一区分一区分における文章の完結性の高さや、一区分ごとに教訓や処世訓や作者の執筆理由を読み取ろうという読み手の意図を感じることがない。作中の各文章は、独立して完結し、そのひとまとまりごとにべつべつのテーマや作者の意図を持っているのではなく、次から次へとつながってゆくことによって、的確にその区間に意味を生じさせ深かまって展開してゆく。それが、写本改行区分から予想できる作品本来のありかただといっていいだろう。

特に正徹本の改行区分はそういった本来の在り方、作者の意図を、しっかりとつかんでいるようだ。現行章段区分とは本来面々と文章が続いてゆく作品から、てっとりばやく処世訓や、教訓、知識を得ようとして本来の改行区分を細分化していった結果である。まさに現行章段区分は、作品に対して、現行第十一段に描かれるような、たわわなみかんの木につけられたきび

しい囲いのような役割を果たしてしまっている。作品から自分にとって有益な果実を確実に手に入れる為に、本来続けて作品を読むことによって浮かび上がってくる意味をばらばらに解体してしまったということが言えるだろう。

『徒然草』は長短様々、文体もさまざま、内容も雑多な文章が、何ということもなく書き連ねられた作品ではない。また作者が見て聞いて日常から得た知識や思考やそれに付随する折々の思いを人生の節々にそのままに書きつけた物でもない。作者の一つの一貫した意図によって、書きたいもの、表現したいことの塊がしっかりと胸にあって、それゆえに、「そこはかとなく」一見すると際限がみえないぐらいに、文章が面々とつづいてゆく、作者の確たる創作意欲にもとづいて生じた作品といえるだろう。

1 橘純一『日本古典選』一九四七年一月二十五日初版発行朝日新聞社

2 松本新八郎「徒然草その無常について」「文学」二六巻一　一九五八年一月

3 下西善三郎『日本の作家１００人　兼好』「Ⅱ徒然草」〔p.p.216-220〕勉誠出版では、これまでの成立諸説をA「逐段執筆」説とB「編集」説という二つの観点からまとめている。

4 朝木敏子『徒然草というエクリチュール　随筆の生成と語り手たち』二〇〇三年一一月一五日清文堂出版

5 桑原博史「徒然草本文批評の方法」「国語と国文学」東京大学国語国文学会一九六六年八月

6 「正徹本」は『徒然草〈上〉静嘉堂文庫蔵正徹筆』一九九八年三月二十日四版弟一刷『徒然草〈下〉静嘉堂文庫蔵正徹筆』二〇〇三年三月二十日四版第1刷、「常縁本」は古典文庫弟一九〇冊『つれづれ草常縁本上巻』一九六三年五月二十日発行、古典文庫弟一四九冊『つれづれ草常縁本』一九五九年十二月二十日発行、「東大本」は勉誠社文庫35『徒然草細川幸隆本　上』一九七八年二月二十日発行、勉誠社文庫36『徒然草細川幸隆本　下』一九七八年二月二十八日発行、「烏丸本」は『烏丸光広本　徒然草』一九九四年三月二五日再版発行勉誠社を調査した。

7 「徒然草寿命院抄」「野槌」「なぐさみ草」については、吉沢貞人『徒然草古注釈集成』一九九六年二月二十五日発行勉誠社で調査をおこなった。「磬斎抄」は有吉保編集「加

8 藤磐齋古注釈集成3『長明方丈記抄・徒然草抄』」一九八五年一月十日発行新典社、「文段抄」については『徒然草文段鈔上』『徒然草文段鈔　下』北村季吟著新典社　一九七九年二月十日、一九七九年三月十日発行、「諸抄大成」は、長野県立図書館蔵、奥書「貞享五辰戊五月京都肆吉日版行」『徒然草諸抄大成』で調査をおこなった。

9 烏丸本と『寿命院抄』を含む六つの注釈書の区分数は242～247である。

10 各写本間の区分に相違については最近のものでは、池田恵美子「徒然草の章段配列について―諸本間の章段区分の相違―」「中央大学国文」38号一九九五年三月がある。表は7に既出の四本によって作成した。

11 烏丸本には文章内における読みやすさに便宜をはかって「○」が用いられている。例えば現行区分の序段と一段は「つれぐなるままに○ひくらし○（次行）すゞりにむかひて○心にうつりゆく（次行）よしなし事を○そこはかとなく○書（次行）つくれば○あやしうこそものぐるお（次行）しけれ○いでや此世にむまれてはねが（次行）」という具合で表記されている。現代の読点や句読点とも異なる読みやすさの工夫がなされている。

12 正徹本36箇所、東大本31箇所。

13 現行第四段と五段の間と、現行第95段と96段の間、現行228段と229段の間は改行はされているが文頭に朱点がない。

14 現行一五三段と一五四段の間、一箇所。

15 正徹本の「●」印は朱墨であることが他書によっても確認されているが、常縁本の「/」印については前掲の古典文庫解説にも墨色については触れられておらず、朱墨であるか黒墨であるかははっきり確認できていない。

16 7に既出の諸本に依って作成した。正徹本の図と同じく、もともと各写本にあった改行区分数を□で、朱墨点区分独自の区分数を○で、改行区分にも朱墨点区分にもない、現行章段区分独自の区分数を◇で囲って現してある。また烏丸本については印による区分がないので図を割愛したが、改行区分243のうち239区分がそのまま採用され、四区分が不採用。五区分が改行区分には存在せず現行章段区分には存在する、現行章段区分独自の区分となっている。

17 岩波文庫『新訂徒然草』一九二八年一二月二十五日第一刷発行　西尾実　安良岡康作校注。

一行の字数は本論による。

（平成十四年度修了）